

ちよつとした緊張感から感じたこと

吉岡 晶子

年長の生活も後半になり、子どもたちの姿に成長を感じたりまだまだと思ったりする。つつい願いと期待とで、こんなはずではない、もつとしっかりやって、もつともつと……私の気持ちが先走り子どもたちの気持ちとのずれを感じるときがある。でも、ハッとさせられ考えさせられた出来事があった。

ある朝のこと、チャボの餌にと大根の葉が届いていた。子どもたちと刻もうと机や包丁を出して準備をしていると、年中組のA子とB子がやってきた。この二人はここ数日チャボを抱きにくいていた。「やりたい」と嬉しそうに言う。私も「葉っぱを切りたいの？ そうなの」と応え、「ここにすわってね」と二人を椅子に座らせた。そこへ年長児のM子とN

子が通りかかった。この様子を見ているので「やりたいんだって」と言うと、N子の表情が一瞬堅くなつた。じつと二人を見ながら何やら考えている。この反応は、私には意外だった。どうなるのだろうか。とどきどきしてしまつた。するとN子は「じゃあ、私たちが包丁で切るから、切つたのをお皿に入れてくれる?」と言つた。「それでいい?」と聞くと、A子とB子はにこにこして「うん」と頷いた。

クラスの中では一番生まれが遅く体も小さいN子、日頃は友だちについていったり声をかけて貰つたりしているようなN子。この時のN子の真剣な表情にはいろいろな思いがあつたのだろう。包丁はちよつと危ない、大丈夫かな、どうしたらいいかな。あつさりいいよとは言えないな”と考へていたのではないだろうか。そして出した結論がこうであつた。

N子の真剣な表情、出した答えを聞いて私は嬉しかった。N子には、年中兎にやらせてあげたいとい

う気持ちがある。包丁は危ないということへの緊張感は、私以上にあつたようだ。その中で「私なんかかしくちや」という緊迫感があつたのだろう。必死で考へた。その気持ち、姿勢にN子の成長を感じた。ちよつとした緊張感から生まれるその子の力を感じた。このような体験を子どもたちは日頃もつとしていたのではないか、ついつい足りない面に目が向いてしまい、そういう場面に気付いてあげていなかった、という思いになつた。そして、この様な場を、私自身もつと生かして関わっていくことが、一人ひとりの物事に取り組む姿勢の育ちに繋がるのではと感じた。

N子はひざまずいて一生懸命に大根の葉を刻んでいる。A子とB子はリラックスして椅子に座ってお



り、嬉しそうに時々刻んだ葉っぱをお皿に入れていた。しばらくして様子を見に行くと、今度はA子とB子が刻んでいた。

十二月の防災訓練の日の出来事。園内ではそれぞれ思い思いに遊んでいるときに合図があった。子どもたちは、とるものもとりにあえずその場にしゃがんで放送を聞き、全員で学外に避難した。年少組と年中組は保護者が引き取りに来て降園したが、年長だけは安全を確認したということで幼稚園に戻った。

幼稚園に戻ると、当然そこは嵐のあととでも言うような状況。園庭も砂場も遊戯室も、もちろん保育室もすべて遊んだまま、使った遊具はそのままやりっ放しの状態。そこで、みんなに「幼稚園は遊んだまま、おもちゃもみんなそのままになっている。いま、ここにはあなたたちしかいない。みんなで幼稚園を片付けよう」と投げかけた。まだ避難訓練の緊張した雰囲気が続いており、子どもたちは「う

ん」と頷いていた。

「きょうは、どこを片付けるかは、並んでいる順番にするね」と伝え、「この六人は森の組。次の六人は林の組。次の六人は遊戯室……」と分担を決めた。「では始めよう」と声をかけるとパッとそれぞれの場所に行った。この時、だれも「ぼくはどこ?」「わたしは?」と聞きに来なかった。普段はそうなりがちなT夫、Y夫もすぐに行動していた。この動きはいつもの片付けの時とは全然違って機敏だった。

それぞれ分担で任された部屋でどのようにしているか様子を見に行ってみた。森の組のメンバーは男児の中に女兒が一人という組み合わせ。もともとあまり遊具が散らばっていなかったこともあって、早くきれいになってしまい、担任の先生にフォローしてもらいながら「あとはどこをやればいいのかね」と聞いたりしていた。

林の組ではK子が中心になって片付けていた。私

が行くと「ここからやってるの」とままごとコーナーを片付けており、二度目に見たときはみんなでせつせと机を運んでいた。「終わったよ」と自分のクラスに戻ってきたときにはいかにも「自分たちでやってきたよ」と言う表情であった。担任の先生が戻ってくるのが遅かったこともあり、自分たちでどのように片付けをすすめようか考えたらしく、いつものお帰りの時間のように部屋の中は椅子がきれいに並べてあった。

遊戯室は大型積み木、ブロックなど沢山のものがあつた。ここは隣の海の組のメンバーと一緒の片付け。量が多いので大変かなと思っていたが、部屋に入ったときの印象が「みんな嬉々としている」という感じだった。いつもは、片付けを要領よくすり抜けがちだったり、消極的なメンバーもいそいそと動いていた。予想外に早く片付け終わって保育室に戻ってきた。あまりの早さに驚いて「もう終わったの？」と言うと「ぜんぶ終わっちゃったよ」と、

とても嬉しそうだった。

感心したのは保健室でのことだった。保健室を分担のひとつに入れそびれていたが、自分たちの分担のところが終わった人たちが気付いて片付けていたのである。一瞬、絵本を見ているのでは（保健室に絵本コーナーがあるので）と勘違いして一言言いそふになつたが、なんとか言わずに済んだ。ほかにも園内のいろいろなところを片付けていた。勿論他の先生方のさりげないサポートがあつてのことだが、「わたしたちがやらなくちゃ」という使命感が前向きに行動させていたように思う。

この時の子どもたちの様子に、みんなすごい、みんなこんな力があるのか、と見直してしまった。いつも遊んでいる仲良しの仲間とは違う偶然性で決



まったグループ。年長のこの時期ということもあるが、そういうメンバーでも、目的を一つにして行動出来るということ。その時の引き締まった気持ち。そこからくるエネルギーを感じた。年長組だけしかないということでプライドをくすぐられ、自分たちは大きいんだという気持ちになれたことや、目的が分かりやすかったことなども子どもたちの気持ちをこうさせていたのだろう。目の前の新しい状況に気持ちをしっかりと向けること、自分の身を置くこと、そのことが一人ひとりの育ちに繋がることを感じさせられた。やる気を引き出してあげること、引き締まった気持ち、緊張感からくる集中力、行動力を発揮できるような場を生活の中で生かしていきたいと思った。

片付けに時間がかかった園庭のメンバーも戻ってきてから、みんなでお弁当を食べたときには、きつと集中してやり遂げたあとの達成感を感じていたと思う。

思い出してみると、ハンドベルのときもハッとさせられたことがあった。一学期のことである。女児たちはすでに「ちようちよ」や「チューリップ」などの曲を友だちと何人かで演奏していた。なんとか曲らしくなってきたおり、お客さんの前で演奏し、聴いてもらったり見てもらったりして達成感を味わったりしていた。そのようなハンドベルとは違うシーンに出会った。

ある日、保育室にはあまり人がおらず、静かであった。ド・ド・ソ・ソ・ラ・ラ・ソ：ベルの音が聞こえる。部屋をのぞいてみると、三人の男児がピアノに向かって立ち、立てかけてある譜面をじっと見ながらキラキラ星をやっていた。譜面といっても、ドレミを書いてベルの色と同じ色で印をつけてあるもの。私には三人の後ろ姿しか見えない。この三人はあまり楽器を手にしたことはなかった人たち。意外だった。ちよつとたどたどしく音を繋いで、ひとつひとつ丁寧なベルを鳴らしていく。やり

方はよく分かっているようだ。集中していて緊張感が伝わった。私がいることは気付いていない。三人の気持ちが一いつになつていた。友だちの音を聞きながら自分の音を鳴らしていく。曲が終わった。三人の背中がゆるんだ。私もホッと力が抜けた。思わず拍手をすると、三人は振り向いてニコッと照れくさそうに笑った。

このシーンが思い出された。あの後ろ姿からくる張りつめた感じ、そのあとの満足感。プレッシャーや力みではなく自分から真剣に取り組む気持ちになつたがゆえの緊張感。それを体験したことが本人たちにもたらしたことがきつとあつただろう。

最近、子どもたちは投げごま回しに挑戦している。瞬間的なことだが、ごまを回すときの力の入れ方抜き方にも通じるところがある気がする。まだうまくごまを回せず「先生、やって！」と言われて手を添えて手伝うときに、本人の力の入れ方が伝わっ

てくる。力が入りっぱなしだと大抵失敗するが、「投げるときはやさしくね」と言葉添えると、構えたときには身体がピリツとしていても、投げる瞬間に力が抜けて成功したりする。その時の嬉しさは格別。あの緩急のバランスが大事であり、そういうことが生活の至る所にあるように思う。力を入れたままでもだめ、抜いたままでもだめ、スツと力を入れスツと力を抜くこと、それを積み重ねていくことが物事にきちんと立ち向かうことにつながるのではという気がした。

チャボの餌の出来事から、思いつくままに今までの生活の中で感じたことを振り返ってみたが、日々の小さな出来事をもう一度見つめて、一人ひとりの物事への気持ちの向け方を支えていきたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)